

クリティカルなポスト・ヒューマニズムとは何か —Stefan Herbrechterを例として— A Study on the Critical Posthumanism of Stefan Herbrechter

根村直美
Naomi Nemura

日本大学経済学部 Nihon University, College of Economics

Abstract This study explores critical posthumanism, propounded by Stefan Herbrechter, by comparing it with transhumanism, put forward by some philosophers. Critical posthumanism is similar to transhumanism in that it assumes the technological progress has caused and will cause changes in humans and their environments. However, critical posthumanism is different from transhumanism in that it considers technological progress seriously because it would open the door to rethink and reconstruct exclusivity and hierarchical structure in the philosophy of modern enlightenment. Critical posthumanism seems an ethical project which leads us to heterogeneity and pluralism and makes the future of our technological society more democratic.

キーワード クリティカルなポスト・ヒューマニズム, トランス・ヒューマニズム, 人間中心主義, テクノロジー

1. はじめに

サイエンス・フィクションなどのポピュラー・カルチャーにおいては、すでに20世紀の後半から、テクノロジーによって改変される人間、また、人間を超える知性をもった機械の姿が描かれてきている。『ターミネーター』や『マトリックス』といった映画やサイバー・パンク小説などはその例であり、そこでは、人間を改変するロボット工学的なインプラントや人間を圧倒する恐れのある非常に高い知性をもったコンピュータが表現されている (Nayar, 2014:6-7)。

一方、W. J. Mitchellは、自分自身がいま日常的にJ. C. R. Lickliderの言う「人間と機械の共生」状況にあり、「環境にちりばめられ、感覚と知性をもつ、互いにつなげられたデバイスと相互に作用している」と述べている (Mitchell, 2003:34)。文化研究の論者たちは、こうした人間—機械の接続状況をポストヒューマンと呼ぶようになっていく。その典型的な例は、Katherine Haylesの議論である。Haylesは、ポストヒューマンというのは、「知性をもつ機械と結びついているばかりではなく、その結びつきが強く多面的なため、もはや、生物学的な有機体と、有機体が組み込まれている情報的な循環の間に有意な区別をつけることは難しいことを意味する」 (Hayles, 1999: 35) と論じている。

「ポスト・ヒューマニズム」は、ポピュラー・カルチャーの表現、または、テクノロジー、特に、情報テクノロジーが人間と人間の生活を不可逆的に改変しつつある現実の状況に言及するための言葉として用いられるようになっていく。その一方で、そうした表現や状況に基づき、人間を新たに概念化する動きを指す言葉としても展開しはじめている。そして、近年では、自らのポスト・ヒューマニズムを「クリティカルなポスト・ヒューマニズム」と位置づける論者も出てきてい

る。その1人が *Posthumanism: A Critical Analysis* を著した Stefan Herbrechter である。

Herbrechter は、時としてポスト・ヒューマニズムと呼ばれるもう一つの潮流、すなわち、「トランス・ヒューマニズム」と自らの立場の違いを示すために、自らを「クリティカルなポスト・ヒューマニズム」と呼ぶ。この両者の違いを明らかにすることは、テクノロジーが人間と人間生活を大きく変えつつある現状を受けて起こってきている「人間」概念の見直しの動きを理解するため、さらには、その理解を通じて我々の未来を考えていくためには必要な試みであろう。そこで、本稿では、トランス・ヒューマニズムの核となる考えを明らかにしたうえで、トランス・ヒューマニズムとの対比を通じて Herbrechter のクリティカルなポスト・ヒューマニズムがどのようなものであるかを紐解いてみたい。

2. トランス・ヒューマニズムとは

トランス・ヒューマニズムは、テクノロジーによる生物学的な改変は“人間”を改善すると考え、ある種の未来を確実なものにするテクノロジーの能力を信じるという点で、技術決定論的、かつ、テクノ・ユートピア的である (Nayar, 2014: 6-7)。究極の目標を、ほぼテクノロジーのみを通じて達せられる人間の未来に見るのである (Nayar, 2014: 7)。たとえば、トランス・ヒューマニスト的状況の指導的哲学者 Nick Bostrom は、人間を改変するテクノロジーの可能性に対する最も賢明なアプローチはテクノロジーの進歩を受け入れることであると論じる (Bostrom, 2005: 203)。

そして、トランス・ヒューマニストたちは、改善可能な、“人間”という明確に確認しうる実体、あるいは、人間の“自己” = “人格” が存在すると考えている (Nayar,

2014:6)。トランス・ヒューマニズムは、“人間”を他の種類の生命と絡み合った構築物と見ることを拒否し、テクノロジーをすでに存在している人間の性質を増補するものであり、人間の欠陥を補うものと扱うのである (Nayar, 2014:6)。

こうした考えに拠って立つトランス・ヒューマニズムを Cary Wolfe は「強化されたヒューマニズム」と定義している (Wolfe, 2010: x v)。次のような、Pranod Nayar によるトランス・ヒューマニストたちの議論の整理は、Wolfe のそうした定義の妥当性をよく示していると言えよう (Nayar, 2014:6-7)。

トランス・ヒューマニストたちは、人間の身体上の限界はテクノロジーを通じて乗り越えうるものであり、その結果、より速く走り、より高い知的能力をもち、あまり病気とならず、長く生きる人間の身体がいつの日か地球上に存在しうるようになるを見ており、人間は完成に向かって進むことができると信じている。たとえば、Bostrom によれば、トランス・ヒューマニズムは、「現在の人間の性質は、健康寿命をのばし、知的能力や身体的能力を拡張し、心的な状態やムードに対するコントロールを増大させる応用科学や他の方法の利用を通じて改善しうる」と考えている (Bostrom, 2005: 202-3)。言い換えれば、トランス・ヒューマニストたちは、現在の人間の姿を、人間の進化形が到来する前の途中段階と見ているのである。

さらに、M. Bess によれば、現在では、エンハンスメントとは、「人格的特徴を改変することを意図した介入であり、それなくしてはその人格を特徴づけることができなくなるような性質や能力を付与すること」と定義されるようになってきている (Bess, 2010: 643)。トランス・ヒューマニズムは、“人格性”のキーとなる特徴としての人間理性、および個人のアイデンティティを信頼し、身体を精神の領域を限界づけるものと見る。また、初期のトランス・ヒューマニストたちは、道徳問題について語ることはまれであったが、Ingmar Persson と Julian Savulescu, James Hughes のように、最近のトランス・ヒューマニズム哲学者は、より進んだ共感性、利他性、倫理的責任能力をもつ道徳的に進化した人間について考えている (Persson and Savulescu, 2010; Hughes, 2010)。そうした論者たちは、道徳的な強化を欠く能力の増進は、認識論的に向上であったとしても道徳的にはマイノリティが大きな害をこうむることになり、退歩になると捉えているのである。このように、「人格的特徴」を重視するトランス・ヒューマニズムは、その特徴ゆえに人間を動物・植物から分離させようと考えた啓蒙主義的な理想を信じ続けていると見ることができる。

3. Herbrechter のポスト・ヒューマニズム

本節では、Herbrechter の *Posthumanism: A Critical Analysis*¹⁾ におけるクリティカルなポスト・ヒューマニズムがどのようなものかを前述のトランス・ヒューマニズムとの比較検討により明らかにしていきたい。

3. 1 テクノロジー

Herbrechter のクリティカルなポスト・ヒューマニズムは、第2節で取りあげたトランス・ヒューマニズムと同様、20世紀末と21世紀初めのテクノロジーの発展、特に、情報テクノロジーのそれが、人間や人間生活を変容させつつあることを前提とした立場であることは間違いがない。しかしながら、そうしたテクノロジーに対する評価の仕方には相違がある。トランス・ヒューマニズムは、テクノロジーによって実現される未来を理想とするという点で、テクノ・ユートピア的であるのに対し、Herbrechter のクリティカルなポスト・ヒューマニズムは、必ずしもテクノ・ユートピア (多幸症) に満ちているわけではなく、そうした未来が不可避であるとは考えない。むしろ、両義性をもつテクノロジーの変化を分析することこそを課題と見なす。

Herbrechter によれば、“記述的な”形のポスト・ヒューマニズムとは以下のようなものである (pp. 16-18)。このポスト・ヒューマニズムは、クリティカルでもそれほどクリティカルでなくとも、熱狂的なものであれ煽情的なものであれ、皮肉たっぷりなものであれ不安を感じさせるものであれ、“ポストヒューマン”を可能性として捉え、いわば、言説的な対象としてきている (*posthumanism*)。この立場は、主にテクノロジーによって推し進められてきたように見える。また、それは、“ポピュラーな”ポスト・ヒューマニズムの広く知られた面、つまり、新聞・ポピュラーサイエンス雑誌・未来学者・広い意味での知識人・マーケティングの専門家・他のロビイストなどに見られる、多かれ少なかれ煽情的な芸術と文化分野の混合物にますます対応しつつあるように見える。それらは、Slavoj Žižek が、C. P. Snow の“二つの文化”の議論を思い起こす中で主張したように、“第三の文化”と呼ぶものである。Žižek は、多くの文化理論家や文化研究の支持者がテクノロジー現象に非常に魅せられているため、彼らは、科学的メタファーの権威を問い、その真実性を正当化することを忘れる傾向があることを明らかにしている。認知科学的なアプローチは、しばしば、かなり素朴な形而上学的方法で“究極の答え”と“真の性質”を探究しているように見なされる。このことは、クリティカルなポスト・ヒューマニズムというプロジェクトにとって、現在・過去・未来のテクノカルチャーの状況を重要視する必要がある一方で、それらの不可避性には異議を唱える必要があるということ意味している。

かくして、Herbrechter は、課題は、文化的変化という観点から、多元的で両義性をもつテクノロジーによる変化、この場合、ヒューマニスト的価値システムのポスト・ヒューマニストのものへの潜在的な“置換”をクリティカルに評価することであるとして、次のように論じる (pp. 19-20)。20世紀末と21世紀初めのテクノロジー的な発展が加速し激しく進んできたことは否定しえないものに見える。そして、現在の文化を“テクノカルチャー”と呼ぶのが通例となるまでに科学、文化とテクノロジーの境界線が浸食されつつある。テクノサイエンス的な文化は、もはや多くの中の一つの文化的・政治

的構成要素ではなく、支配的で制度化された経済的・イデオロギー的な力であり、基本的なレベルで、人々が共に生きるあり方、アイデンティティを形成する仕方、個々人の身体表現の諸形式に影響を与えている。そこで、“クリティカルなポスト・ヒューマニズム”の“クリティカルな”という言葉が意味するのは、正確には、人間とポストヒューマンと非ヒューマンの間のラディカルな相互依存性と相互浸透性という考えに基づいて、テクノロジー化のプロセスを分析することこそが課題ということである。この相互浸透性は、政治的、経済的、哲学的、テクノサイエンス的、そして、文化的レベルで起こっている。そのため、新たな知の生産には、より努力と集中を必要とする、人間・社会・自然・認知・バイオあるいは生命科学の間の学際的的形式が必要とされるであろう。

3. 2 人間中心主義

上述のようなテクノロジーに対する考え方の違いは、人間という生の形式に対する考え方の違いに由っている。すなわち、トランス・ヒューマニズムが、人間存在という〈実体〉を前提とし、かつ、人間中心主義的であり続けているのに対し、Herbrechterのクリティカルなポスト・ヒューマニズムは、人間とその人間性を、イデオロギーから自由な超越的な概念ではなく、歴史的なものであり文化的構築物であると、さらに人間を歴史の中心におくのではなく、様々に絡み合った生の諸形式一つと見なしている。

また、人間と人間性を実体的・優越的に捉えることがないクリティカルなポスト・ヒューマニズムは、主体やアイデンティティの理解において、トランス・ヒューマニズムとは立場を大きく異にしている。トランス・ヒューマニズムは、普遍的一般的な人格的特質を想定し、個人のアイデンティティを信頼する。それに対して、Herbrechterのクリティカルなポスト・ヒューマニズムは、主体やアイデンティティの構築性やその特質の状況依存性を前提とする。

そうした考えを表しているのが、Friedrich NietzscheとJean-François Lyotardについて考察している議論であり、また、ポスト構造主義のヒューマニズム批判を受け展開している議論である。

3. 2. 1 Nietzsche

Herbrechterは、次のごとく、Nietzscheの「普通以上の道徳感覚における真実と嘘」(Nietzsche, 1977:42-50)をポスト・ヒューマニズムという概念の出発点と考える(p. 2)。Nietzscheのニヒリスティックで相対主義的で、挑発的な“人間”や“賢い動物”への挑戦は、キリスト教徒的な価値によって促された狭量さと自ら招いた神なき状態に向けられた。同時に、Nietzscheの批判は、解放された、生を肯定する“超人”の出現の土台を用意するものであった。Nietzscheによるすべての価値の再評価、それは、モラリストとヒューマニストにうちにある真実と偽りの間の伝統的区別を退け、その代わりに、新しい非道徳的でポスト・ヒューマニスト的状况を

描写することを目指すものである。しかし一方で、人間という種の傲慢さ、および、“世界史”の人間中心主義的な見解をあざけっている。それゆえ、Nietzscheは繰り返し最初のポスト・ヒューマニストの思想家と言われるにもかかわらず、現在広く見られるポスト・ヒューマニスト的なテクノ・ユートピアに満ちていたわけではないようである。確かに、純粹に機械的な補填では、Nietzscheの望む超人の出現にとって十分ではない。その超人は、“蚊”とコミュニケーションし、それから学ぶほど謙虚な一方で、ヒューマニズムの自己愛的なパトスに打ち勝つのに十分に力強いのである。

Herbrechttersは、トランス・ヒューマニティの預言者のある者は嬉しそうに“人間の終焉”を宣言するが、自身が提唱するクリティカルなポスト・ヒューマニズムは、ある種の人間の“観念”、すなわち、人間のヒューマニスト的観念の終焉の研究をめざしていると論じ、次のように言う(p. 3)。クリティカルなポスト・ヒューマニズムにおいては、人間やその過去・現在・未来について気にかける人は、ヒューマニズムの人間中心的なイデオロギーに批判的に関わることを望む、と考える。黙示録的な神秘主義、あるいは、精神性や超越性の新たな形式に陥ることなく“人間の終焉”について考えることは、クリティカルなポスト・ヒューマニズムというフレーズが指し示そうとしている態度と呼応するものである。ここでの“クリティカル”という語は、二重の機能をもつ。それは、テクノカルチャー的な変化のもつラディカルな性質に対して開かれていることを示す一方で、批判的にヒューマニズムに関わり、部分的には、ヒューマニズムそれ自身から発展した諸々の思想的伝統とのある種の連続性を強調している。それゆえ、課題は、アンチ・ヒューマニスト的な批判の形式を評価し直し、それらを現在の状況の変化に適合させ、場合によってはラディカルな形に変えることなのである。

3. 2. 2 Lyotard

Herbrechterはまた、以下のように、Lyotardの「ポストモダンの寓話」(Lyotard, 1993: 79)というエッセイのうちに、興味深い出発点を見る(p. 4-7)。

そのエッセイは、「〈人間〉とその〈脳〉は、というよりも〈脳〉とその〈人間〉は、彼らの惑星の崩壊以前に決定的なカタチでその惑星を離れようとするとき、そのすがたかたちはいったい何にたとえることができたでしょうか。そのことを、物語は語ることはなかったのです」²⁾という一節ではじまる。太陽系が滅びるときまで人間が生き残るとするならば、太陽の爆発に際して生き延びることができるように、テクノロジー的、そして、進化論的に自分自身を変化させているであろう。すべての終焉という究極の事態の後に物語の続きがあるとすれば、続きを語る種は地獄を逃れることにならざるをえない。それゆえ、Lyotardにとって、ポストヒューマン化は、人間という形式に将来惑星間の移動をさせるためには、不可避の変容の過程であるように見えるのである。

Herbrechttersによれば、その寓話が示しているのは、人間と

いう種のテクノロジー化が進んでいることを否定しても意味がないが、他方で、ポストヒューマン化の純粋にテクノロジー中心の考えは、ヒューマニスト的なパラダイムから逃れるのに十分ではないということである。すなわち、テクノロジーによって補強されることで実現されるポストヒューマン的な人間性という一般的な考えは、しばしば、イデオロギー的には素朴なヒューマニスト的な価値の影響を受け続けている。その一方で、文化理論や人文学の伝統的なアプローチは、通常、十分に歴史化されていない、あるいは、疑似神話的な“人間の本質”に基づいた“人間”の観念の擁護において、あまりにも人間中心主義的であり続けている。それゆえ、クリティカルなポスト・ヒューマニズムは、人間という種を歴史的な“効果”とし、ヒューマニズムをイデオロギー的な“性向”と理解し、一方でその両方から距離を取る。クリティカルなポスト・ヒューマニズムは、最初から、自分自身を“ヒューマニズム”の後にくるものと位置づけているわけではなく、脱構築的にヒューマニズムのうちに宿る。そして、Lyotard のテクノロジーと“非人間”という考えは、単に手段であり、それ自身目的ではない。クリティカルなポスト・ヒューマニズムとは、正確には、*post-human* (ポストヒューマン) 的ではなく、*post-humanist* (ポスト・ヒューマニスト) 的なのである。

Lyotard の『非人間的なもの—時間についての講義—』というタイトルのコレクション (Lyotard, 1988) の意図もまた同様であったとして、Herbrechter は、以下のようにも論じる (pp. 7-9)。

そのコレクションに収められているエッセイはヒューマニズムの傲慢さに向けられたものである。それらは、ヒューマニズムは依然として我々に教訓を示し続けるであろうとする考えを批判するものである。むしろ、厳密に言えば、“人間”それ自身の分析に抗することに基いているヒューマニズムの権威は、衰えかけている。Lyotard は、「人間が、ヒューマニズムの意味で、非人間になりつつある、あるいは、ならざるをえないとするならば、それは何なのか。…人類に“ふさわしい”ものが非人間な存在にも宿るとするならば、それは何なのか」と問う。人間的な存在における非人間性は、二つの形式を取る。その一つが、“システム”の非人間性、もう一つは、人間的なものをその“秘めたる”中核にもつ非人間的な存在である。また、Lyotard と“もはやヒューマニスト的ではない”思考方法にとって、自然と文化の間の弁証法が排除してきたもの、すなわち、残余、他者、非人間的なものこそが問題である。人間的なものの“本質”，あるいは、真なる存在というのは、実際には、“不在”なのである。

なお、最初のアプローチは、広く言えば、文化的物質主義的方法を、典型的な人間中心主義的なパースペクティブに陥ることなく、練り直したものである。人間と人間性は、生態系、科学技術、あるいは、進化のようなより広い文脈の中におかれなければならない。このアプローチは、もはや、人間を解放の歴史の唯一のヒーローではなく、複雑な生の諸形

式の進化の一つのステージと見なす場合に、ポストヒューマン的なものになる。

第二のアプローチは、非人間なものや人間的なものを宿す他者を気にかける。これは、人間性の精神分析、すなわち、人間になる道で失われた抑圧されたものと折り合いをつけることを目指す。それゆえ、ポストヒューマンとポスト・ヒューマニストは、すべてのゴースト、人間化される過程で抑圧された他者、動物、神、悪魔、あらゆる種類の怪物を認めることになるのである。

両方のアプローチとも、伝統的なヒューマニスト的世界観と人間理解は、外的な、そして、主として技術的、経済的、あるいは、生態学的な影響ゆえに、また、内的で形而上学的・倫理的な理由ゆえに、重要でないわけではないが、批判に耐えられなくなっているという確信を共有しているのである。

Herbrechter は、次のようにも言う (pp. 15-16)。クリティカルなポスト・ヒューマニズムの観点からするならば、少なくともルネッサンス以降のヒューマニズムとヒューマニズム的な伝統の徹底的な批判は、“人間とは何か?”という問いに先行する。自分自身をそのような伝統の“後”に置くこと、つまり、ポスト・ヒューマニズムは、二つのアクセント形式が可能となりうるような意識的な曖昧さをもちあわせている。一つは、ある種のヒューマニズムが終焉をむかえたという否定しえない経験である (*post-humanism*/ポスト・ヒューマニズム)。もう一つは、多元性と捉えどころのなさゆえに、ヒューマニズムは、残余と抑圧なくしては分類しえないばかりではなく、クリティカルで脱構築的な意味において、“対処”される必要があるという確信である (*post-humanism*/ポスト・ヒューマニズム)。

3. 2. 3 主体とアイデンティティ

Nietzsche と Lyotard の議論を受ける Herbrechter はまた、ヒューマニズムのポスト構造主義的な批判の最も重要な支点は、主体性やアイデンティティに対する言語 (あるいは、手段もしくは“技法 [technics]”) の優越であるとして、以下のように論じる (p. 11)。

ヒューマニズムとは、疑似神秘的な普遍的“人間性”を常に確認し、人間一般の一体性を促す偉大な文化的達成をうみだしていこうとする思考である。ポスト・モダニズムとポスト構造主義により攻撃されているのは、まさにその考え方である。そして、ヒューマニズムのイデオロギーの取る文化的策略は、ポスト・モダニズム的とポスト構造主義的な原理によって刺激を受けたポスト・ヒューマニスティックな批判の対象になり続けている。

ポスト構造主義やポスト・モダニズムは、徹底的にローカルで一時的な状況特殊性を強調し、意味の内在性を否定し、葛藤を含んだ意味の構築を強調する。また、それらは、想定されているメディアの透明性を批判し、いかなるメディアもダイナミズムをもち、アイデンティティを構築し、主体を

“設置する”力をもつことを強調する。さらに、それらは、価値の相対性ととともに、人間の本質と個性の変化可能性と相対性を強調する。加えて、それらは、超越的理想形に抗し、形式と内容の不可分性、および、徹底的に文脈の決定機能と過程としての真理を強調する。つまり、思考の物質性と行為者における“身体化”の重要性を主張するのである。

このような考察を受け、Herbrechter は、次のようにも論じる (pp. 12-13)。普遍性とヒューマニズム的な主体の個別性の原則は、真理と表象の観念とともに疑問に付されることになるが、論理的・理論的・哲学的には、クリティカルなポスト・ヒューマニズムがその徹底した形となる。それは、人間が表象やアイデンティティなくして何かをすることはできないからである。ポスト・ヒューマニズム的な批判的・文化的な理論の試み全体は、解釈学のポスト・リアリスティックな形式、および行為者のポスト主体的な形式の構築にはかならない。かくして、Michel Foucault の“人間の終焉”というフレーズは、歴史的、言説的に批判的な意味で見られるべきで、必ずしも、歓喜に満ちた意味や黙示録的な意味で見られるべきではない。Foucault のそのフレーズには、二つの直接的な含意がある。第一に、探究すべき対象としての人間の歴史化は、哲学的人間学やいわゆる“人文学”の枠組みを超えるであろうということである。そして、第二に、多くの文化理論家やいわゆる哲学者や科学者によれば、Foucault によって描かれたシナリオは、たとえば、“ポスト・ヒューマニティ”に向けての移行という形において、すでにリアリティをもっているということである。

3. 3 他者

最後に是非ふれておきたいのは、Herbrecht's のクリティカルなポスト・ヒューマニズムは、ヒューマニズムのうちの排除と抑圧のメカニズムを可視化するがゆえに、以下のごとく、新たなテクノロジーに目を向けていることである (p. 28)。

気にかかる問題は、ポスト・ヒューマニティへの途上にある人間進化の次のステップが不公正・差別・搾取・抑圧の新たな形式をうむのかどうか、あるいは、ポスト・ヒューマニティのステージが人間という種の完全な消滅につながるのかどうかである。あまりに熱狂的にテクノロジーを迎え入れる中で、我々は、既に自分自身の後継である種をうみだしているのか。機械は人間の決定的な終焉を待っているだけなのか。権力の移譲においてサイボーグは唯一の不可逆的なステージなのか。これらの問いはすべて共存に関わるものである。また、もし“人工知能”というフレーズを文字通り捉えるならば、人工知能がヒューマニズム的、あるいは、人間的な原理に従って機能することに本来的な必然性はない。それゆえ、それが“自己組織的”になったのであれば、人工知能に対してどう振る舞えばよいだろうか。それは倫理的、かつ、政治的な問いを引き起こす。機械の権利は認めるべきなのか。機械はアイデンティティ、文化、それ独自の美学をもつか？

機械はまさに人間が自分自身をその“他者”，むしろ“他者”たちから区別する伝統的な形式の一つであるがゆえに、こうした議論も避けて通ることはできないものとなっている。新たなテクノロジーは、新しい人間についての問いを引き起こすのみならず、ヒューマニズム的なカテゴリーと排除のシステムに挑戦している。人間が“消滅”する瞬間、抑圧されたアイデンティティの鏡像が亡霊のように戻り、歴史の人間中心主義は書き直さざるをえない。そうした亡霊について考えることは、奇形学 (怪物の創造、怪物性・非人間性・動物性の表象) が、いかに差異のシステムと種々のヒエラルキーを創りだし確認するのに利用されるかをにわかには可視化する。そのシステムとヒエラルキーは、特異性と例外主義の主張をとまう人間の“本質”という神秘的な観念によって支えられたものであり、また、人間の本質というのは、包摂と排除の過程を認可し永続させるデバイスである。このことこそが、クリティカル・ポストヒューマニズムが、テクノロジー的な変化という側面を軽視しない理由であるが、それはまた、クリティカルなポスト・ヒューマニズムがテクノロジー的な変化を理想化することを防ぐものでもある。人間原理の断片化と多元化は、ヒューマニズムの歴史のクリティカルな読み直しを活発化する。同時に、クリティカルなポスト・ヒューマニズムは人間の条件、あるいは、ポストヒューマンの条件に関わる新たな方法を要求するのである。

4. トランス・ヒューマニズムからクリティカルなポスト・ヒューマニズムへ

これまでの議論を見るならば、トランス・ヒューマニズムと Herbrechter のクリティカルなポスト・ヒューマニズムの相違は明らかであろう。

前節で述べてきたように、近年のトランス・ヒューマニズムは、モダニズムのある側面、すなわち、道徳的能力を含む人格的特徴やアイデンティティを有する点において他の存在に優越することを信じる<啓蒙主義的なヒューマニズム>の加速された形となっている。そうした意味での<啓蒙主義的なヒューマニズム>に基づく価値システムは、トランス・ヒューマニズムによって前提とされているものであり、トランス・ヒューマニズムは、それらのモダニズム的な諸価値を最大限に追求するものなのである。とするならば、トランス・ヒューマニズムが理想化するような未来のテクノロジー社会を批判的に検討するのに、<啓蒙主義的なヒューマニズム>に拠って立つことは難しいであろう。

一方、Herbrechter のクリティカルなポスト・ヒューマニズムは、<啓蒙主義的なヒューマニズム>を文化的文脈の中におき、そのことで、<啓蒙主義的なヒューマニズム>のうちにある排除とヒエラルキーの構造を明るみに出そうとする。そのクリティカルなポスト・ヒューマニズムは、<啓蒙主義的なヒューマニズム>の見直しなくしては、そのうちにある排除とヒエラルキーの構造の構造が未来のテクノロジー社会にそのままもちこまれていくのを防ぐことができないと考え

るのである。そうした<啓蒙主義的なヒューマニズム>の見直しに際して、Herbrechter は、ポスト・モダニズム的な営為を欠くことのできないものと捉える (pp. 22-23)。たとえば、Herbrechter は、そのクリティカルなポスト・ヒューマニズムにおいて、「ラディカルな多元性と異質なヴィジョンや“言語ゲーム”の民主的な共存に拠って立つポストモダンのエートス」を受け継ごうとする。それは、想定された“大きな物語”の終焉後、人間性とその変容に対するテクノロジーの役割についての進行中の議論が新たな支配的物語、すなわち、自分自身を不可避で、不可欠、信用できるものとして描くような物語になるのを避けるためである。また、Herbrechter は、ヒューマニズム的思考を通じて排除されてきた<人間ならざるもの>の意味を問い直し、より<民主的な>社会をあり方を目指している。Herbrechter のクリティカルなポスト・ヒューマニズムは、Wolfgang Iser の“横断的な理性”などが、現在のテクノサイエンス的な理性の脅威に対抗するために用いることができることを示唆する。

以上のごとく、<啓蒙主義的なヒューマニズム>の批判的検討を不可欠とする点こそが、トランス・ヒューマニズムと Herbrechter のクリティカルなポスト・ヒューマニズムの最大の分岐点と言えるであろう。Herbrechter は、<啓蒙主義的なヒューマニズム>の諸前提を問い直すことにより、テクノロジーによって呼び起こされた変化に目を向けつつもそれを理想化することを回避しようとする。それとともに、多元性・異質性に開かれた未来社会のあり方を模索しようとするのである。

こうしたクリティカルなポスト・ヒューマニズムの立場は、<自己組織的な>人工知能などが我々の生活の中に組み込まれつつあることを考えるならば、示唆に富むと言えよう。クリティカルなポスト・ヒューマニズムは、人間が構築される中で抑圧されてきた他者、すなわち、あらゆる種類の怪物に目を向けようとする。その姿勢は、<啓蒙主義的なヒューマニズム>が想定する人間性との共通点を見出すことではなく、そうした枠組みでは捉えられないことをそのまま受けとめた<うえでの<他者>との共生という課題に向き合おうための第一歩と考えることができるからである。

5. おわりに

本稿では、まず、「トランス・ヒューマニズム」の基本的な考え方を幾人かの論者を取りあげるとまた。そして、その「トランス・ヒューマニズム」との対比を通じて Herbrechter における「クリティカルなポスト・ヒューマニズム」がどのようなものであるかを明らかにした。

Herbrechter のクリティカルなポスト・ヒューマニズムは、テクノロジーの進展が人間と人間の生活に大きな変容をもたらしつつあることを踏まえるという点ではトランス・ヒューマニズムと軌を一にする。しかし、Herbrechter のクリティカルなポスト・ヒューマニズムが人間と人間生活を変容させるテクノロジーの進展に注目するのは、<啓蒙主義的なニュー

マニズム>のうちの排除とヒエラルキーの構造を問い直しその構造を変容させる可能性をもつと考えているがゆえである。この点において、Herbrechter クリティカルなポスト・ヒューマニズムはトランス・ヒューマニズムと決定的に袂を分かっているのである。

こうした違いは、Herbrechter のクリティカルなポスト・ヒューマニズムが、ポストモダンの思考を一つの起源としていることに由っている。Herbrechter のクリティカルなポスト・ヒューマニズムは、我々の関心を異質なものと多元性へと向かわしめ、未来のテクノロジー社会をより<民主的>たらしめようとするプロジェクトと捉えることができるのである。

こうしたクリティカルなポスト・ヒューマニズムに拠って立つのは Herbrechter ばかりではない。今後もこのようなクリティカルなポスト・ヒューマニズムの系譜を探り、<啓蒙主義的なヒューマニズム>が想定する人間性によっては捉えられない<他者>との共生のヒントを探っていきたい。

補注

- 1) 以下、この著作で展開されている議論を扱う際には、本文中の括弧内に該当する頁を入れることとする。
- 2) ここでの日本語訳は、訳書『リオータル 寓話集』（本間邦雄訳、藤原書店、1996年）に従った。訳書でpp. 112。

引用・参考文献

- Bess, Michael (2010) "Enhanced Humans versus Normal People: Exclusive Definitions" *Journal of Medicine and Philosophy* 35: 641-655.
- Bostrom, Nick (2005) "In Defense of Posthuman Dignity," *Bioethics* 19.3: 202-215.
- Herbrechter, Stefan (2013) *Posthumanism: A Critical Analysis*. London: Bloomsbury Academic.
- Lyotard, Jean-François (1977) *Moralités postmodernes*. Paris: Galilée = (1996) 本間邦雄訳『リオータル 寓話集』藤原書店。
- Lyotard, Jean-François (1998) *L'inhumain: Causeries sur le temps*. Paris: Galilée = (2002) 篠原資明・上村博・平芳幸浩訳『非人間的なもの—時間についての講話—』法政大学出版局。
- Mitchell, William J. (2003) *Me++: The Cyborg Self and the Networked City*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press = (2006) 渡辺俊訳『サイボーグ化する私とネットワーク化する世界』NTT出版。
- Nayar, Pramod K. (2014) *Posthumanism*. Cambridge: Polity Press.
- Nietzsche, Friedrich (1977) *The Portable Nietzsche*. Translated by Walter Kaufmann. London: Penguin Books.
- Wolf, Cary (2010) *What Is Posthumanism?* Minneapolis: University of Minnesota Press.